

## 場所の占有について

舟橋 國男\*

建築は生活の容器であるといわれる。従ってそれは、生活様式と人間的自然に基づくべく要請される。たとえばわれわれにとって、環境条件の安定と変化、心身両面の弛緩と緊張などは、それぞれ適度なバランスを保つことが望まれる。次々に目まぐるしく新しい環境に遭遇してはどうにか適応し、一つの場所との親近、住みこなしの暇など望むべくもない今日の都市生活者にとって、環境との安定した関係の探究は一つの課題であるといえよう。

この点に関連して、人間と場所との結びつきや、個人または集団による空間の一時的または継続的な支配のありかた、あるいは安定した場所の形成などは、古くから計画学上のテーマの一つであった。近年、動物行動学における Territory 問題が人間の空間行動へ拡張・導入され、この視点からも注目されている。

いうまでもなく人間のテリトリーは、動物のそれとは相当様態を異にするが、その存在は認められており、アルトマンは人間のテリトリー行動を、「場所または物の個人化もしくは印づけ、ないし個人・集団による所有の事実の伝達を伴う自己・他者間境界調整機構である」とし、そのタイプを、日常性・自我中心への関与の程度および時間的継続の程度から、以下のよう

① **Primary Territory** : 住宅やその寝室のように個人または集団によって排他的に所有され使用され、他人からその所属が明確に認知され、相対的に永続的な基盤に基づいて統御され、占有者の日常生活において中心的である。強力なプライバシー調整機構である。

② **Secondary Territory** : 常連客の多い飲

屋やクラブなどのように、個人または集団がある程度の統御・所有・規制力を持つ場所であるがしかし、①ほどではない。他人が何らかの理由で接近し時に使用者も変化し、その区域も常に特定の占有者に属するとは限らない。

③ **Public Territory** : 街路・公園・公共的施設のように、一時的な性質を有し、ほとんど誰でもが自由に出入でき、占有権を持つ。習慣や法規・規則によって統制され、利用は時間的に制約されるのが普通である。自己・他者間境界調整機構としては相対的に弱い。

以下、準公的な施設における特定利用者の場所占有・個人化の傾向に関する簡単な調査から、上記の②もしくは③について、その形成の様相を探ってみる。

調査は表1、図1に示す、座席の指定されて

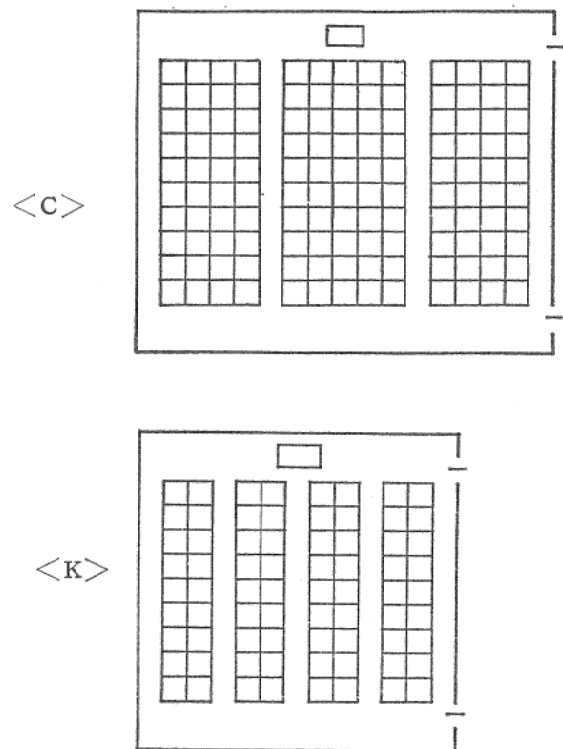


図1. 調査対象室

\* 舟橋國男 (Kunio FUNAHASHI), 大阪大学, 工学部, 建築工学科, 足立研究室, 助教授, 建築計画学

表1 調査概要

(※) 延平均1座席当り被選択回数

調査対象講義室・略号	座席数	観察回数	受講者及び出席状況				記録方法	
			属性	人数	延出席人数	平均出席人数 (※)		
C女子短大講義室・〈C〉	130	7	女子学生	56	312	45	2.40	受講者が平面図に氏名を記入
K会館内講習会場・〈K〉	72	10	成年男子技術者	46	299	30	4.15	調査員が平面図に氏名を記入

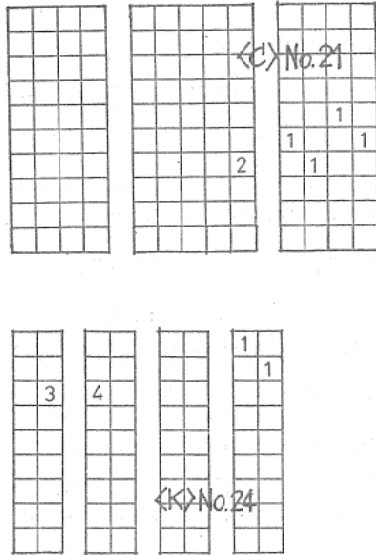


図2. 受講者別座席選択状況例

(No. 21, No. 24はそれぞれ受講者番号、  
図中の数字は選択回数を示す。  
無記入の座席は選択されていない。)

いない2つの講義室を対象とし、受講者各々について毎回どの座席に座るかを記録した。結果は図2に例示するような座席選択状況として受講者別に得られる。

まず選択された座席の空間的分布・位置関係を無視し、各受講者ごとの同一座席重複選択の様態(以下、SOPとする)に関し、有意な重複傾向を示しているかあるいは偶然の選択結果とみるべきかを検定した。表2によれば、いずれ

表2 重複選択パターン分類の期待値と観測結果

R: 有意水準5%で棄却されないパターンの数  
N・R: 有意水準5%で棄却されるパターンの数

	〈C〉			〈K〉		
	R	N・R	計	R	N・R	計
ランダム選択の期待値	55.5	0.5	56	45.2	0.8	46
観察によるパターンの分類	39	17	56	12	34	46

の講義室においても受講者は全体として、ランダムな選択ではなく、特定の座席に偏って選択を行い、場所の個人的占有傾向があると推測される。また、ランダム選択といえない者(N・R)は、〈C〉よりも〈K〉において有意に多い。

本来、各自が自由に何処を選んでもよい筈であるにもかかわらず、〈K〉のような、互いに未知な者よりなる「聴衆」の、10回程度の反復においてさえ、相当の占有化が窺われ、〈C〉のように1~2年間にわたる「クラス」にあっ

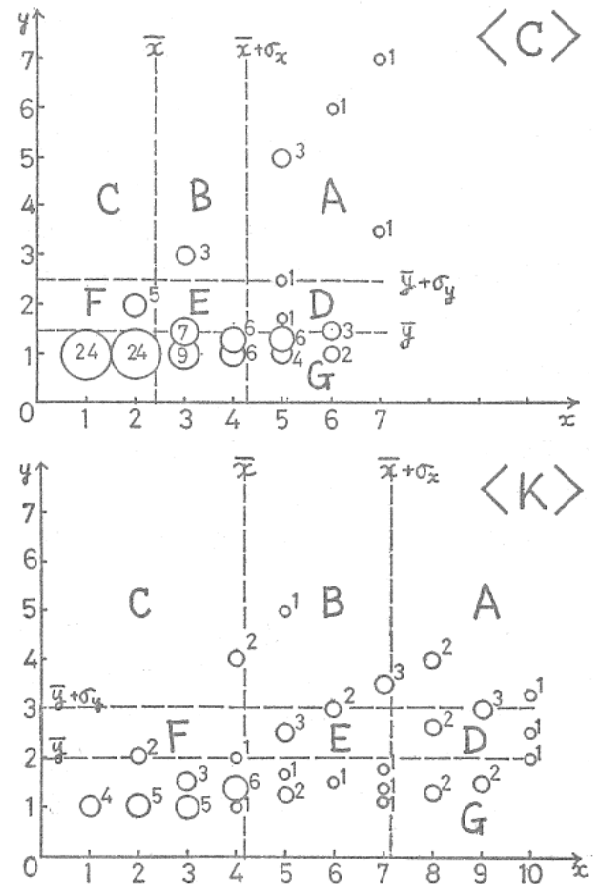


図3. 延被選択回数xと同一受講者平均占有回数y  
(グラフ内数字は座席数を示す)

$$y = \frac{\text{延被選択回数 } x}{\text{当該座席を選択した異なる受講者の人数}}$$

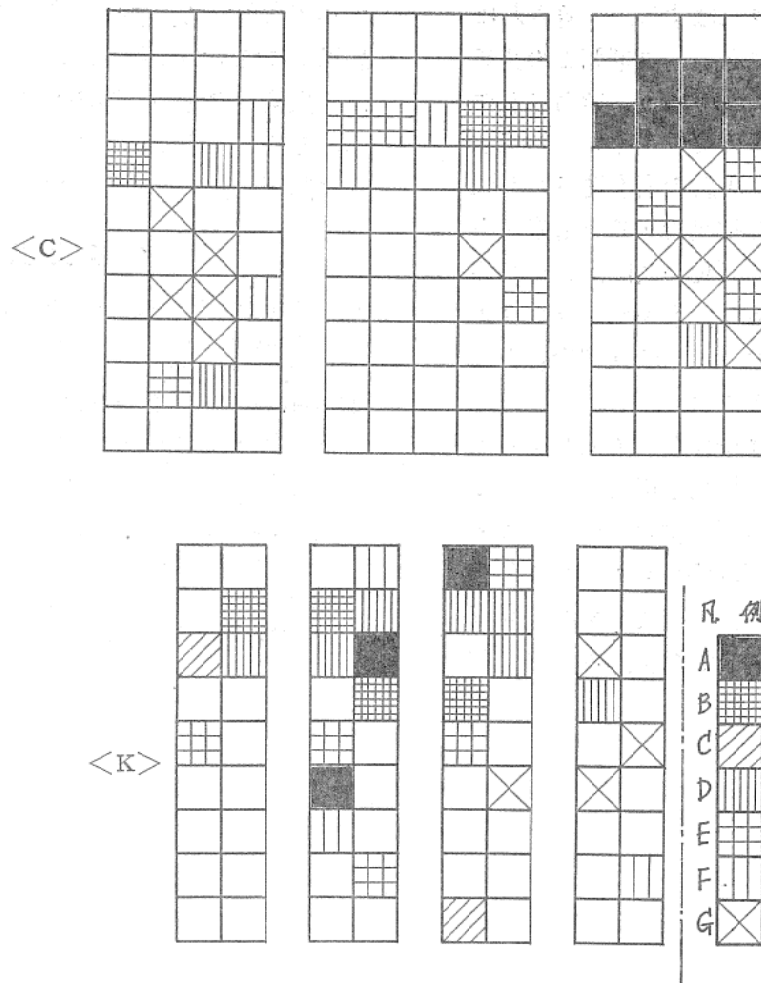


図4. 座席の占有誘意性ランク

ては、暗黙のうちに座席がある程度個人化し、その所有を互いに認め合うようであり、より強固なものになっていくと思われる。このようにして、利用開始初期の temporal な Public Territory が、利用の反復に従い、集団の性質の変化を伴いつつ、徐々に Secondary Territory へと接近していくという、常識的な予測が一応考えられる。しかし、<C>においてさえ「ランダム選択」の仮説を棄却できぬ受講者（R）が存在し、かつその比率は<K>よりも大であるなど、問題は単純でない。

占有傾向の強い者は、その属する集団において、より dominant なメンバーであるという動物行動学の知見を立証すべく試みている心理学者の研究もあるが、人間集団における個人の dominance の評価にも困難が伴っているように思われる<sup>2)</sup>。

次に、各座席について、同一受講者による重

複選択の程度、すなわち、個人的な占有のされやすさを当該座席の占有誘意性として算出し、個人化されやすい座席の位置的特徴を調べた。図3、図4のA、B群に見るごとく、それらは<C>においては前から2～4列目で横方向に分布し、<K>では中央部で縦方向に分布する。

両講義空間のこの差異の原因、特に建築的条件に関して、現段階では明らかでない。どちらかといえば、大学の講義と社会人向講習会という条件差を中心とする両者間の Behavior Setting<sup>3)</sup>における差異として了解する方が妥当であるように思われる。

なお、G群は延被選択回数 $x$ が多いにもかかわらず、同一受講者平均占有回数 $y$ の低い座席であるが、これらは共に、出入口側の行の中央部付近に分布し、<C>においてのみ出入口から最も奥まった行の中央部にも分布する。これ

らはいわば“屢々選択されはするが定着されにくい”座席ということになる。長期間この講義室を使用している〈C〉において、定着されにくい座席をなお選択し続けているというのは了解し難い。むしろ、当該座席の占有誘意性が強く受講者間で奪い合った結果であるとも考えられる。しかし、〈C〉、〈K〉共に、これらG群に属する座席の選択者は、大多数がランダムに近いSOPを示しており、やはり“定着されにくい”座席と一応考えておく。

以上、略述した調査は全体として未だ試みの域を出ず必ずしも簡明な結果を得ていない。また、入室順序や友人の影響の検討、部分的に形成されたかと思われるTerritoryに対する侵害と反応に関する検討など、すべて今後に残されている。しかしながら、公的な施設内の場所選

択利用において、特定場所への個人的執着は予想以上に強くかつ早く現われており、“意味深い”建築への志向を強めつつある今日の状況を鑑みる時、計画に当って一応視野に入れておくべき問題と傾向であるとは言えまいか。

#### 参考文献

- 1) Altman, I. *The Environment and Social Behavior* Brooks/Cole Publishing Co. 1975, pp. 103—120.
- 2) DeLong, A. J. *Domiance-Territorial Relations in a Small Group Environment and Behavior* Vol. 2, No. 2, Sept. 1970, pp. 170—191.
- 3) Barker, R. *Ecological Psychology: Concepts and Methods for Studying the Environment of Human Behavior* Stanford Univ. Press 1968.